

無芸大食への奈落 (続き) ~アマチュア国日本の黄昏~

木俣 美樹男 (黍稷農季人)

Infernal regions as “no accomplishment but eating” (continuation of preface)
~ A twilight of Japan as an amateur state ~

Mikio KIMATA

巻頭言が長くては具合がよくないので、ここに続きを書く。いずれこのことは詳細に検証し、上梓したいと思っている。

『帰去来の辞』で陶淵明は言っている。もちろん、主語は陶淵明であるが、現代の私や私たちに置き換えることもできる。さらに敷衍すると、すべての人類のことでもあるように思える。現代文明を自然に添わせるように、継承する文明のトランジションをゆっくりと始めた方が良いと思う。

以下に、帰去来の辞の現代語訳の一部を記す。「さあ故郷へ帰ろう。

故郷の田園は今や荒れ果てようとしている。

どうして帰らずにいられよう。

今までは生活のために心を押し殺してきたが、もうくよくよしていられない。

今までが間違いだったのだ。これから正しい道に戻ればいい。

…… (中略) ……

さあ故郷へ帰ろう。

俗世間と交わるのは、もうよそう。

世間と私は最初から相容れないものだったのだ。

いまさらまた任官して、どうしようというのか。

…… (中略) ……

農夫がやってきて私に告げる。そろそろ春ですね、西の畑では仕事が始まりますと。

…… (中略) ……

万物が時を得て栄えるなか、

私は自分の生命が少しずつ、

終わりに近づいているのを感じるのだ。

…… (中略) ……

まあ仕方の無いことだ。

人間は永久には生きられない。

命には限りがある。

どうして心を成行きに任せないのか。

…… (中略) ……

富や名誉は私の願いではない。

かといって仙人の世界、などというものもアテにならない。

天気の良い日は一人ぶらぶらし、

傍らに杖を立てておいて、畑いじりをする。

…… (中略) ……

自然の変化に身をゆだね、

死をも、こころよく受け入れる。

こんなふう天命を受け入れてしまえば、

もはや何のためらいも無いだろう。」

(<http://kanshi.roudokus.com/kikyorai.html>)

アマチュアの国日本の黄昏が、今、なぜ不可避なのか？ もちろん、気づき、努力すれば、今からでも没落は避けることはできる。しかし、誰かが気づいていても、多くの人々は三猿のように、見ないふりをして、聞かないし、ましてや言わないので、やはり残念ながら、このままでは日出る国の日没は近いのであろう。

さて、議論を深めるために、まずはアマチュアとは何かから問わねばなるまい。近代オリンピックの創立者クーベルタンはアマチュア主義を尊び、「オリンピックの出場者は、スポーツによる金銭的な報酬を受けるべきではない」と考えた。換言すれば、プロフェッショナルとアマチュアの区別は次のようなことではないのだ

ろうか。

会社で経理事務をしている人が、趣味でチョウチヨの研究を自費でしているなら、彼は経理のプロフェッショナルであり、チョウチヨ研究のアマチュアである。趣味が高じて、博士号まで取得し、会社を退職して博物館の学芸員になれば、研究で給料も研究費も受け取るので、プロフェッショナルになったことになる。このように、アマチュアがプロフェッショナルを凌駕することは素晴らしいし、さらに、この延長でプロフェッショナルになるのは願わしいことでもある。

しかし、アマチュアが専門的な研鑽を積まないで、いつまでも専門的職業に留まることには問題がある。どうして、引退したスポーツ選手やタレントが、専門的な政治的スキルを要する国会議員に当選するのだろうか。テレビに出て有名になり、知名度で多くの票を獲得できるからである。知名度で個人得票も比例区得票も有利に獲得でき、テレビ番組が国会議員をつくるということになる。彼らには国民の代表として立法府（国会）における政策立案能力を期待されているのではない。政策立案は官僚任せで、立法府の役割である議員立法はまれにしかないからである。

日本の民主主義ではいまだに三権分立は実をとまなっていないようだ。三権力に関わる方々は十二分に義務を果たさず、責任を取らずに、自己保身を保守主義と称して偽装しているので、火山噴火、地震・津波などの自然災害、水俣病などの公害、原子力発電所の崩壊のような人為災害に対しても、この国では地位ある誰もが自己保身ゆえに、現場でも、事後においても危機管理ができず、責任をとらないという構造になっている。

率直に言えば、権力ある地位にいる方々は義務として社会的責任をとらねばならないし、他方、庶民といえども家族や地域社会に対しては市民としての責任を果たさねばならない。この国では明治維新以来、次第に、常民は生業をなくして食料安全保障に対する思考を停止し、無芸大食、悪しきアマチュア政治家により拝金主

義の極致へと導かれ、中央国家が地方故郷（くに）を衰退に追い込んできた。本来なら、フランス革命の「自由、平等、博愛（友愛）」の精神によって、市民社会の成立へと進んだはずである。

国家 vs くに、為政者 vs 庶民の対立の中で、いつの時代でも、優れた庶民はいるが、混乱の中で斃れ、正史には載らない。正史などに載せる必要はないが、庶民・常民・市民で、社会正義を貫いて、人類の文化的進化を進めた人々を忘れずに、彼らと自らの歴史、および故郷（くに）の歴史を語り継がねばならない。

日本の場合、保守主義といっても実際は権力者の自己保身である。自己保身と保守主義は異なる。保守底流の立場からすれば、市民社会の個人主義、民主主義、自由主義はフランス革命などによって獲得された社会制度を保障する考え方として、持続せねばならない。オーウェルの描いて見せた「1984年」の全体主義の世界は願い下げだ。現実のこの年には、著者らは第1回野外教育セミナーを開始していた（p27参照）。環境教育という手法で、インドのマハトマ・ガンディーに学んで、非暴力・不服従主義の世直しを求めようとしたのである。

水戸学（水戸光圀）、国学（平田篤胤）の系譜が、廃仏毀釈から国家神道へと導き、水戸藩と薩摩藩は尊王攘夷へと進み、桜田門外の変から戊辰戦争をへて、薩摩藩・長州藩閥と岩倉卿ら公家は明治維新政府を確立していったと、気づかされる。明治維新の歴史的功罪を再検証するところから、日本の、この国家と故郷の未来が再創造される契機が生まれると考えようになった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという思い付きを確かめるために、薩摩藩（鹿児島県）に行った。神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行き、また、この地の地域出版物を読んで、なぜ、雑穀畑作文化が水田稲作文化に消されてきたのかという、長年の疑問が解けてきた。

日本民俗学の祖といわれる柳田国男も最初は

日本の山民に強い関心を持って、『遠野物語』や『山の人生』などを書いていたが、官僚であったためか、山村の畑から農村の田んぼに研究の中心を移して、国家主義の政策に沿うようになったようだ。八百万のカミガミはじめ、山の神や誰もが、いもや雑穀を食べた縄文文化を軽視し、栽培しても、自ら食べられずに、有力者に取り上げられたイネ（米）の弥生文化の系譜を偏って重視するように、柳田は関心を変化させていった。

今日でも、天皇家は日本の伝統を後世に継承して、アワとイネとを新嘗祭に供儀されているというのに、明治維新によってこの国は畑作の縄文文化の系譜を損ねてきた。天皇家は縄文のアワ、弥生のイネを共に新嘗祭に供しており、伝統をつないでいる一族である。論理的には、天皇制は「自由・平等・博愛」の精神に添わず、民主主義には合致しない。しかし、天皇家が象徴としてこのくにの伝統を継承されておられることには、熱い共感を覚え、プロフェッショナルに対する尊敬の念を禁じ得ない。

何故ならば、この国は「無食政治家」によって、金融経済のグローバリズムに導かれて、終に TPP（環太平洋経済連携協定）に参加し、食料生産・農業を諦めて、稲作さえも捨て去ろうとしている。これには将来を見ない、自己保身的な政治家や官僚だけではなく、深く勘ぐってみれば、無知は無恥であり、農業をすてた金融機関農協も、農産物は安ければよいという都市の消費者も共謀しているようだ。

この流れは雑穀・いも畑作を否定的にとらえた明治維新の政策の系譜から第2次世界大戦時の配給制度などの政策に発している。国家主義は幾多の戦争へと向かい、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」には「神風」も吹かずに、歴史上初めて外国に膨大な物量と人員を第2次世界大戦に投入したアメリカ軍に、本土進攻を許す大敗を喫した。このため、決定的に「稲作民族」としての誇りさえを失い、ごはん食（イネ）がパン食（コムギ）に置き換わり、米（イネ）の消費量が減り、減反政策がとられた。敗戦後に、「ムギ官僚」があらわれ、配給コムギはア

メリカの余剰生産物で、食糧を国際貿易の商品にする嚆矢になった。

帰去来の辞に強い共感をもつ。陶淵明を自らに重ねて、自分の信念を貫くことに誇りをもつ。あと一年で義務に縛られた職業人生活は終わる。人生の振り返りをする季節になったようだ。ところで、改めて考えている。大学とは何だったのか？

「この世で大学ほど美しいものはない。なぜならそこは無知を憎む人間が知識を得るために努力し、真実を見たものがそれを広めようと努力する場所だからだ。」(J. メイスフィールド)

参考文献

- 青屋昌興、2012、薩摩史談 一西郷隆盛と明治維新、南方新社、鹿児島市。
朝日新聞鹿児島総局編、2008、薩摩の殿、南方新社、鹿児島市。
芳即正、2009、権力に抗った薩摩人 一薩摩藩政時代の真宗弾圧とかくれ念佛、南方新社、鹿児島市。
名越護、2011、鹿児島藩の廃仏毀釈、南方新社、鹿児島市。
下野敏見、2012、鹿児島ふるさとの昔話2、南方新社、鹿児島市。